

デジタル時代のメディア・リテラシーをいかに測定するか

A Study of Measurement of Media Literacy in the Information era

後藤 康志

Yasushi Gotoh
新潟大学大学院

Graduate School, Niigata University

生田 孝至

Takashi Ikuta
新潟大学

Niigata University

<要約> メディア・リテラシーを「メディア操作スキル」「メディアに対する主体的な態度」「批判的思考(傾向性・技能)」に分け、測定する尺度を作成した。作成した尺度は内的一貫性が認められた。また、尺度とメディアに対する知覚の関係を検討したところ、主体的態度や技能が高い群ほどインターネットを好み、有用であると知覚しているのに対して、そうでない群ほどテレビに依存しているといったように経験的な知識と合致する結果が得られた。「批判的思考・技能」についてウェブ情報の分析視点を測定する尺度を作成した。作成した尺度の内的一貫性は高く、尺度値が高い者ほど情報源の確実性を保証するために必要な手段を指摘できるなど、妥当性も高いことが示唆された。

<キーワード> メディア・リテラシー スキル 態度 批判的思考

1. 背景と目的

メディア・リテラシーは情報の受信と発信に関わる複合的な能力であり、その定義は様々である。水越・中橋(2002)はメディア・リテラシーの構成要素をメディアの操作、理解、読解・解釈・鑑賞、批判的理解、表現、コミュニケーションとして整理している。Christ(1997)はメディア・リテラシー教育プログラムの評価観点として「技能」、「知識」、「態度・情緒・価値」の3つを挙げ、映像リテラシーやコンピュータ・リテラシー、批判的思考、継続的に学び続ける意欲や態度等を挙げている。以上に共通するのは「メディア操作スキル」、「批判的思考」、「主体的態度」であるといえる。

現在はデジタルメディアの賢い使い手としてのリテラシーが重視される時代に入っている。インターネットやコンピュータ、携帯電話などの情報機器は多機能化・高度化し「メディア操作スキル」や「主体的態度」はますます要求される。デジタル時代の情報発信の特徴は、誰もが送り手になることができ、パソコンや携帯電話のディスプレイを通してあたかも同じ価値を持つかのように提供されることである。今まで以上に情報を鵜呑みにしない「批判的思考」が求められる。

デジタル時代のメディア・リテラシーを

いかに把握するのか。この問題意識から、筆者らはメディア・リテラシー尺度の作成に取り組んできた(Gotoh&Ikuta2004)。この中で、質問項目の妥当性の問題と、メディアから情報を分析し真偽の程度を捉える力量を測定し得る尺度の必要性が指摘された。以上を踏まえ、本研究は次の2点を目的とする。

技能・態度・批判的思考を下位尺度とするメディア・リテラシー尺度を作成し、その妥当性を検討する。
ウェブ情報を分析する尺度を作成し、信頼性及び妥当性を検討する。

2. スキル、態度、批判的思考の尺度

2.1 項目の作成

本研究ではメディア・リテラシーを図1のように捉え「メディア・操作スキル」、「メディアに対する批判的思考(傾向性・技能)」、「メディアに対する主体的な態度」の3つの下位尺度に分けて測定する。

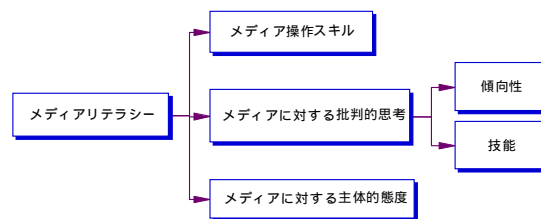


図1 メディア・リテラシー

尺度の作成にあたっては、鈴木ら(1992)、電通総研(1999,2000,2001,2002)、NHK放送文化研究所、宮田(2001)、小池(2004)、鈴木ら(1992)、高比良ら(2001)などの項目を参考に作成した。

2.2 対象

新潟市内の高校生 401 名を対象とした。調査時期は 2004 年 6 月である。

2.3 方法

2.3.1 メディア操作スキルに関わる項目

「自分の好きなホームページをお気に入りに入れる」といったについて「できるしよくする」から「何のことか分からない」までの 4 段階で選択してもらい、最高 4 点、最低 4 点で得点化した。

2.3.2 批判的思考・傾向性の項目

批判的思考の研究では批判的思考の構成要素を態度や情意的な傾向性(disposition)と、認知的側面である能力(ability)とに分けて考えている(Ennis1987)。ここでいう批判的思考は傾向性に関わるもので、メディアに対する情報を「構成されたもの」であるとしてみているかどうかを自己評価してもらう。具体的には「新聞記者はたくさんの情報を集めるけれども、新聞記事になるのはその一部の情報である。」といった項目について、「そう思う」から「そう思わない」の 5 つのうち一つだけを選択してもらい、得点化した。

2.3.3 主体的な態度に関わる項目

デジタル時代のメディア・リテラシーは、メディアからの情報を漫然と受容するだけでなく、自ら進んで情報を求めたり、疑問点があったら複数のメディアにあたって情報を収集したりする主体性が必要である。主体的な態度として「知りたいと思ったことは人に聞くより本やインターネットでさがす方だ」といった項目について批判的思考と同様に得点化した。

2.3.4 メディアに対する知覚

妥当性を検討するために、メディアに対する知覚を測定した。これは、「インターネット」、「本」、「新聞」、「テレビ」の 4 つについて「情報が新しいと思う順番」、「情報が正しいと思う順番」、「好きな順番」、「簡

単に情報が得られると思う順番」の順位をつけてもらうものである。これを 1 位 4 点以下 4 位 1 点になるように得点化した。

2.3.5 信頼性の検討

作成された尺度の信頼性を検討するために尺度と各項目間の相関係数の分析、G P 分析を行った。

2.3.6 妥当性の検討

「技能」、「態度」、「批判的思考・傾向性」の妥当性を検討するために、それぞれの上位・下位群ごとのメディアに対する知覚の違いを検討する。

2.4 結果と考察

2.4.1 信頼性の検討

作成した 42 項目について確認的な因子分析を行い、「技能」、「態度」、「批判的思考」に関する因子を抽出した。この中から技能 10 項目、態度 8 項目、批判的思考・傾向性 10 項目を採用し分析対象とした。項目の分布について見たところ「批判的思考・傾向性」については天井効果が現れている項目があったものの、一応残すことにした。従って、「批判的思考・傾向性」は暫定的な尺度である。

尺度と各項目間の相関係数は「メディア操作スキル」では 9 項目で .5 から .7、「批判的思考・傾向性」では 9 項目で .4 から .5、「主体的態度」では 7 項目で .4 から .6 であり、高い相関を示している。また G P 分析の結果、全ての項目で上位群と下位群の平均値差に 1%水準の有意差が見られた。以上から、尺度の信頼性は高いと思われる。

2.4.2 妥当性の検討

メディア操作スキルでみると「スキルが高いほどインターネットの情報が新しく、簡単に使え、好んで」いる。その一方ではインターネットの情報はマスメディアに比べると「信頼性は低い」と気づいてもいる。これに対して、スキルが低いほど「テレビを好み、正確で、好んで」いる(図 2)。主体的な態度でも同様で、「高主体性群はインターネット、低主体性群はテレビ」という図式である。尺度間の相関を見ると有意な相関があることから、メディア・リテラシーが高いほど複数メディアを利活用し、スキルも高いのに対し、低いほどテレビに依存する傾向が顕著である、

といえる。これは経験的な知識とも合致するもので、作成した尺度の妥当性が示唆されたといえる。

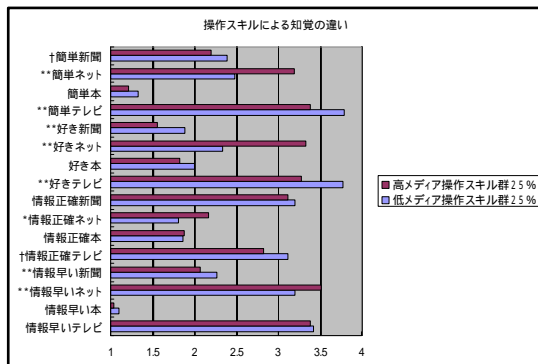


図 2 メディア操作スキルによる知覚の差

3. ウェブ情報の読みとり(批判的思考・技能)の尺度

3.1 項目の作成

次に、デジタル時代のメディアの主要なテキストであるインターネットの情報についての読みとり(批判的思考・技能)の能力を測定する尺度について述べる。ウェブの情報を分析する視点をどの程度有しているかを測定する尺度を Harris(1997)のインターネット上の情報源の評価観点を参考に項目を作成した。具体的には「ホームページの作成者」、「ドメイン」、「作成時期」、「連絡先の明記」、「作成目的」、「作成主体(企業・公官庁・個人)」が「とても気になる」から「全く気にならない」の4件法で選択してもらい、「とても気になる」が4点になるように得点化し、6項目の合計点を尺度値とした。

3.2 対象

現職教員 38 名を対象とした。調査時期は 2004 年 6 月である。

3.3 方法

3.3.1 信頼性の検討

作成された尺度の信頼性を検討するために尺度と各項目間の相関係数の分析、G P 分析、分布の確認、信頼性係数の算出を行った。

3.3.2 妥当性の検討

ウェブからの情報(表 1)を確認するために必要な情報とその情報源は何かについて

自由記述式で回答してもらい、得点上位群と得点下位群の記述内容を比較・検討した。

表 1 自由記述問題の状況設定

あるホームページでダイエット食品が紹介されていた。ホームページでは、ある医学者の紹介文として「この食品は非常に手の込んだ方法で作られているため高価だが、効果もある」と書いてあった。さらに実際にこの食品でダイエットに成功した 3 人の体験談ものせられていた

3.4 結果と考察

3.4.1 信頼性の検討

相関分析について、尺度と各項目間の相関係数は.511 から .718 と高い相関を示していた。G P 分析においては得点分布から得点上位 25% (8 名)と得点下位 25%(7 名)を抽出し、得点上位群と得点下位群の平均値差を比較した(図 3)。結果として全ての項目において 1%水準で有意であった。

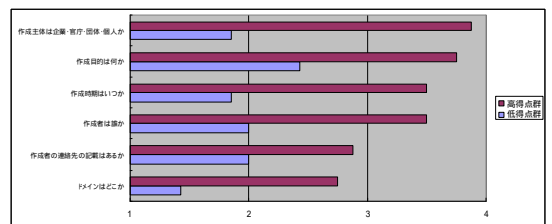


図 3 G P 分析

これを見ると、上位群と下位群の差が際だっているのが作成主体であり、下位群ではインターネットの情報の作成主体が企業・官庁・団体・個人のどれであるかを殆ど気にせずに利用していることが伺える。また、作成者は誰か、作成時期はいつかといったことについてもそれほど関心を払っていない。これらはマスコミ情報であれば一目瞭然で分かる内容であろう。誰もが自由に情報を提供でき、だからこそより批判的な見方が必要なインターネットといえるが、下位群にあってはそういったことが意識化されず、インターネットに接しているともいえるだろう。

次に分布について、表 2 は「ホームページを作った人は誰か」についての反応をまとめたものである。全体としては「あまり気にならない」「少し気になる」を中心に分布しているものの、下位群においては「あまり気にならない」を中心に分布し、上位群では「少し気になる」「とても気になる」

を中心に分布している。6つの項目全てにおいて表2のような分布が得られており、カイ自乗検定も有意かつ有意傾向であった。

表2 群毎の反応の比較(単位・人)

作成者は誰か	下位 25%群	25~ 50%群	50%~ 75%群	上位 25%群	合計
全く気にならない	1	0	0	0	1
あまり気にならない	5	4	0	0	9
少し気になる	1	6	10	4	21
とても気になる	0	0	2	4	6
合計	7	10	12	8	37

信頼性係数を算出したところ.766であった。以上から、作成した尺度の信頼性は高いことが示唆された。

3.5 妥当性の検討

自由記述作文の記述内容を Harris(1997)のカテゴリ(情報源の確実性、情報の正確さ、情報の理性度、サポートする情報の有無)に従って分類した。得点上位群と得点下位群の記述内容を比較したところ、次のような特徴が認められた。

まず記述量であるが、得点上位群の自由記述は量が多く、4つのカテゴリを網羅する形で記述されていた。

次に、記述内容であるが、下位群の記述内容が項目のみを示すものが多いのに対して、上位群の記述は「判断を下すためにどんな情報が欠けているか」、「代わりにいかなる情報が必要で、どう収集したらよいか」まで言及している点が特徴である。

例えば 情報源の確実性のカテゴリにおいて、下位群では記述そのものがない、あっても単に項目のみのレベルに留まるものが多いのに対し、上位群はというレベルまで踏み込んだ記述が多く見られた(表3)。

表3 自由記述の例

下位群	医学者についての情報
上位群	確認事項 - ある医学者。 確認内容 - 栄養(に関する・筆者加筆)学会での信頼と実績はあるか。 手段 - 学会機関誌・業界の人。

単に医学者についての情報が得られたとしても、それは情報源の確実性を保証することにはならない。言及している内容がその人の専攻分野やその領域における周囲の評価と整合していなければ、いかに著名な人間の発言でも情報源の確実性を保証した

ことにならないからである。限られたサンプルからの知見でしかないが、尺度の妥当性は高いことが示唆されたといえる。

4. まとめと今後の課題

4.1 まとめ

作成した「スキル」「態度」「批判的思考・傾向性」に関する尺度は高い内的一貫性が認められた。また、尺度とメディアに対する知覚を検討したところ主体的態度や技能が高い群ほどインターネットを好み、有用であると知覚しているのに対して、そうでない群ほどテレビに依存しているといったように経験的な知識と合致する結果が得られた。以上から、作成した尺度は一定の信頼性・妥当性が確保されたものと考えられる。

また、ウェブ情報の読みとりに関する尺度は「批判的思考・技能」の一側面を簡便に測定できることが示唆された。自由記述は時間もかかり処理も煩瑣であるため、簡便な尺度は実用上も有用であると思われる。

4.2 今後の課題

メディア・リテラシーの評価においては標準化されたテストだけでなく、観察等のあらゆる情報を収集して行われることが推奨されている(Christ1997)。質問紙調査はその一側面を切り取ることしかできないのであり、量的アプローチと質的アプローチとの併用が必要である。

またデジタル時代の主たるテキストである映像について、その真偽や情報や構成された背景をについて、例えば短いビデオクリップによる映像視聴を行い、その分析と解釈を求めるタイプの尺度を開発する必要がある。(付記：本発表の2の一部は Gotoh & Ikuta(2004) A Study of Children's Media Literacy in Japan, Paper presented at British Educational Research Association2004, University of Manchester Institute of Science & Technology, UK.に加筆・修正を加えたものである。)

5. 引用参考文献

- Christ, W. G. (1997) Media Education Assessment Handbook. Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey
- Ennis, R.(1987) A Taxonomy of Critical Thinking Dispositions and Abilities .Teaching thinking skills: theory and practice. Edited by Joan Boykoff Baron, Robert J. Sternberg, Freeman.